

【ねがいましては】

平成27年9月25日

KYOWA SCHOOL

第299号

「垢」

前々回号に続いて灰谷健次郎さんの『優しさとしての教育』より取り上げます。Oさんからの手紙の中に『垢』という表現が出てきます。その部分です。

ある中学校に実習に行った人のクラスに、IQは高いのだけれど、つっぱっていてテストでは30でんぐらいとる男の子がいて、その子に見積もりをさせるとスラスラやってしまう、それを教生が「お前、頭いいなあ」というと「いやー俺バカだからわかんないんだ」と言った、というのです。

私はそれをきいてIQが高いのにもったいない、とってしまいました。

これをお読みになって何かお感じになったでしょうか。いやっ、別に・・・当然ではないのかな・・・と、思われる方は多いと思います。Oさんは教育大に進学し、教育実習に参加し、子どもたちとのふれあいから自分が変化していくのを感じています。Oさんの手紙の続きです。

それは、点数主義のエリート垢(あか)ですね。人間の値うちはテストの点では決まらないと思うのに、とっさに考えるのは、そういうたてまえとは逆の事です。その人(IQの高い中学生)はあのいやらしい優越感を持たずにすんでいるのです。それは私にはうらやましい。昨年春には赤ん坊のようだった私が少しずつ成長してきました。やっと一人で立てるようになったかんじなのです。

Oさんは、IQ値によって得てしまう優越感を、『いやらしい』と形容しています。まさにそのとおりです。100点を取った、クラスで1位になった、学年順位が上がった、通信簿が上がった・・・。そのすべては国家がもたらした教育制度の『垢』だと思います。それになんの疑問も持たずに、そのままその結果に素直に一喜一憂してしまうのは紛れもない『IQが高いのにもったいない』とお感じになった方々です。

私はこのOさんの手紙を読み返すたびに、身が引き締まる思いを感じます。私自身も知らないうちに垢まみれになってしまっている・・・。初心を取り戻すことができます。生後20年あまりの方の体験が私を救ってくれます。Oさんはその気持ちを教育実習先の子どもたちからいただいています。子どもたちは誰から何を教わったわけではなく、ただ自然体で学校生活を送っています。垢まみれになることなくです。子どもたちは生を受け、自身の感じるままに学校生活を送ります。その中で生まれる彼らたちのモラルは、一人の学生を救っています。

Oさんは感謝の気持ちを送っています。

子どもたちは、ありのままの醜い汚い私をうけいれてくれていたんです。私があんなに私のままでいられた場所が、他のどこにあったというのでしょうか。

教育実習先で出会った担任の先生の影響も欠かせません。その先生はOさんが授業していると、平気でうしろで居眠りをし、4時15分になれば、さっさと帰る。授業の打ち合わせもしないような方です。しかし、こう言っています。

「例えば学級会は、子どもを訓練すればスムーズに行うことができるが、大切なのはそんなことではない、だから俺は学級会の時口出しをしない。」

つまり精一杯に子どもたちが生きようとしているのだから、その生きようとするエネルギーを奪ってはいけない、結果失敗に終わったとしても、そこに費やした情熱を評価してあげることだ・・・。そのように私は感じます。

この言を勉強に置き換えてみます。

「例えば勉強は、子どもを訓練すればスムーズに行うことができるが、大切なのはそんなことではない、だから俺は勉強している時口出しはしない。」

子ども自身がこうしたらいいのかな、ああしたらいいのかなと、試行錯誤を重ねながら机に向かっている。その瞳は輝いている。傍らで見ている母親は、その方法では失敗することが目に見えている。すかさず口出しをしてしまう。

大切なことを摘んでしまっているのはお母さんの一言かもしれません。

私も含め、垢まみれになってしまっているところを子どもたちは癒やしてくれます。Oさんは教育実習から生きる力をいただいています。その提供者は子どもたちです。

「俺、バカだから」そう言ってさっと交わってしまう子どもたちが、この小さな空間から生まれるよう努力して参ります。それにはもっともっと多くのプレゼントを子どもたちから吸収しなければなりません。

よろしく願いますよ、こどもたち・・・。ありがとう。